

横山源之助と米騒動

立花 雄一

- 1 横山源之助と米騒動
 - 2 聞書断片
 - 3 経緯
 - 4 発進地区
 - 5 井戸の所在
- むすびに

1 横山源之助と米騒動

富山県下新川郡魚津町（現魚津市）は1918（大正7）年の米騒動発祥地であるが、初期労働事情の古典『日本の下層社会』（明治32年）を開幕期労働運動にたずさわりつつ著した横山源之助の出身地でもある。

横山源之助が世を去ったのは大正4（1915）年であるから、彼はそれから3年後1道3府32県におよぶ、ほとんど日本全土を席捲した米騒動が彼の郷里の浦が発火点となって起こっていることを勿論知らない。

しかしながら、生前の横山には前期米騒動に関する作品が二つある。その二つの作品は予知的であり、1918年の米騒動は横山が書きのこした二つの作品の状況をなぞったように起きている。それはこの地魚津が他の富山県下の浦々とともに幕末以来明治・大正にかけ累年大小の米騒動を惹起し、その行動様式も伝統的にほぼきまったものになっていたからであろう。

その二つの作品とは、

一、世人の注意を逸する社会の一事実（『国民之友』第340～341、345～346号、明治30・3・20～）

一、地方貧民情況一斑 - 一種の貧民救助 - （『労働世界』第12号、同31・5・15）

である。前者は明治22（1889）年10月12日の、後者は同31（1898）年4月下旬の、魚津にあった米騒動の報告である。ところが、この二つの米騒動については、1918年8月富山県警察部作成「富山県下に於ける米に関する紛擾沿革一覧表」に記載がない。またこの県警表に依拠した戦前、戦後

の研究、1939（昭和14）年に書かれながら秘密に付された検事吉河光貞『所謂米騒動事件の研究』や、長谷川博・増島宏「「米騒動」の第一段階 - 富山県下現地調査を中心として -」（法政大学社会学部『社会労働研究』第1，2号），あるいは井上清・渡部徹編『米騒動の研究』にも記載はない。ただその後の青木虹二『明治農民騒擾の年次的研究』中の年表に記録されたのみ。

青木虹二の典拠は、明治22年10月のは『時事新報』であり、同31年4月下旬のは横山が『労働世界』誌上に載せた記事に拠る。そこで、『時事新報』を見てみると、「細民の噪動 越中国下新川郡魚津町にては去る十三日の事なりとか同地より米穀を輸出せんとて同港碇泊の汽船に運搬の際細民等は之を不満に思ひ無慮二千余人の大勢がガヤゝゝ噪ぎ立ちて運搬を妨げ今にも大事に至らんとする勢ひなれば汽船は一時同郡石田村沖合へ転して難を除けし程なりしが其筋の吏員出張の上懇々と説諭せしを以て漸く静まりたりと云へり」（22年10月20日）とある。横山の「世人の注意を逸する社会の一事実」には参加人員の記載はなく、これを10月12日と記す。『時事新報』は10月13日といい、参加人員二千余人という。この数は、当時の人口一万三千人、戸数三千二百、窮・細民にあたる免税・納税不能者二、一七四戸の数にほぼ相当する（「地方の下層社会」）。一方の同31年4月下旬の騒動は「貧民の一部は夜中火事と呼ばはり数十名某米仲買商の宅に闖入し器物を破壊」「警官の捕縛に会ひ富山地方裁判所へ送られ」（『労働世界』）、はては救助米を出すにいたったもの。

横山源之助が報告している、明治22年10月12日（13日か）の二千余人が参集した大騒動も、同31年4月下旬警察が捕縛し裁判所送りになったほどの事件も、富山県警察部作成一覧にはないのである。ただの二件とみるべきか、二件共とみるべきか。さいわい、近年の研究は県警表の杜撰、陰蔽がりをするどく指摘して、あたらしい研究はそのようなところからはじめられていることはよるこばしい（井本三夫「米騒動考」。米騒動史研究会北陸支部『歴史評論』1988・7）。

横山源之助は米騒動の報告においても先駆であったことは今見たとおりである。ところで、横山源之助が「二千余人」が参加した明治22年10月12日の魚津の米騒動を直接見聞したように誤解されている向きもあるようなので、一言添える。明治22年10月当時、横山源之助は東京法学院（前身が英吉利法律学校、後の中央大学）に在学中であり、魚津には不在である。後毎日新聞記者となった横山源之助は同29年夏～30年春にかけ、小作人生活事情を中心とした、「地方の下層社会」他を報告するため、家郷魚津に滞在した。そのとき、去る22年10月12日魚津に大きな米騒動があり、その騒動をきっかけにして一種の貧民救助制度が創設されたことを聞き、そのことを漁民報告として書いたのが、「世人の注意を逸する社会の一事実」である。また、もう一つの「地方貧民情況一斑 - 一種の貧民救助 - 」は『労働世界』（労働組合期成会機関誌）誌上にある無署名記事であるが、それは片山潜らとはじめた貧民研究会に報告するため、横山が「在富山県魚津地方の一知人」よりとりよせた通信を同誌上に載せたものであり、いわば「世人の注意を逸する社会の一事実」の追報にひとしい。序でもう少し。横山が前記二文の米騒動報告のなかで評価した一種の救済制度とは、『魚津市史』近代篇に「明治二三年に誕生した魚津町の予算案と町長の事業報告書には、貧民救助法が提案、報告されている」とあり、改正を経て、いくつもの米騒動、1918年のときにも活用され、太平洋戦争後に生活保護法が成立するまでつづけられたという。それはちいさいながらも為政者であった町当局の神経にとっては幕藩体制下の備荒政策の復活、準用にすぎなかったとしても、漁民の女衆の不条理をただそうとする運動である米騒動の力がかちとった制度であったことにちがいが

ない。米騒動の側面にはこのような成果もあったことは記憶されるべきであろう。

2 聞書断片

1918年の米騒動でさえ、まだ明らかでない面がいくつかある。たとえば、その発祥地が富山県魚津であるというなら、(1)その発進地区はどの漁師町であったか。(2)その指揮者が誰であったか。(3)井戸端会議があった井戸とはどこにあったか。(4)その経緯は。小さい事柄のようで、それこそが歴史の躍動の核心部であるはずだ。いまなお曖昧なこれらの問題に多少とも迫ってみたい。

余談めくが、私も魚津の出身者である。昔私がした聞書が一つある。その紹介からはじめたい。1954年「米騒動」の第一段階^①が出た直後、帰郷したとき、私の友人の母親江口つた（明治25年生）から聞いた。1956（昭和31）年9月町の過半を焼失する大火があって、わが家がなくなる前。江口つたは初動者「四十六人」の一人である。明治44年から昭和5年私の友人三郎を末子とするまで隔年子供を生んできたという多産なこのひとは、漁師町特有の赭ら顔の、見るからにおっかない、進学問題で訪れた私たちの教師をにべもなく逐いかえしたほどのひとである（富山県下の漁師町の嬭天下は有名だが、とくに魚津は最たるもので、巾着のひもをがっちり握り、進学問題さえも親父に発言権はなく、かかさの一存でできた）。40数年前の古ぼけた帳面の片隅に、そのとき私がびびりながら聞いたきりっぱしがメモされてある。それを拾う。「普段のときでも、ととさだけが米の飯を食べ、女、子供は代用食を食べていた」、「釜底の飯はくわすな、といい、（釜の）真ん中の飯だけをツゲ（曲物弁当箱）に詰めた」（底は海底＝遭難に通じるから）、「野の草、海の草を主とし、米を少し混ぜて主食とした」、「海の草に一つだけ食べられない草がある。それ以外ならなんでも食べる」（云い伝え）、「七、八月を鍋割月という、中に入れて煮る米がないから」、「二、三日分の米を二、三日毎に買いに行った」、「一升十銭であった米が二十銭、二五銭に騰った」（二五銭になったのは大正7年2月2日魚津町浜田米店）、「米店の前や、そこらの電信柱に貼紙をはり、葉書をとばした」、「でき町一帯一家一人主義の動員であった」といい、さらにそれを繰り返して「でき町一帯のかかたち、一家一人位づつ出た」ともいう。「直接米屋へ出掛けた」、「餌指町の山沢長兵衛さや、金屋町の高野、大町小川へ」、「米を他国へ出してくれるなどと交渉した」、「警察の干渉があって、遁げた」。

「ねんねをおんぶして行った」、「指導者は高町たつきやさ（家の呼称＝苗字滝本、今は絶家）のおばば」、「わたしら若いあねまは、おとろしくて、そのおばばの前ではよう口もきけなかった」、「そのひとの命令ならなんでもきかなきゃならなかった」、「仲仕（宿）へ押しかけた」、「数日間」、「蒸気（船）が来る時を仲仕の男衆がかかたちに連絡してくれた」（仲仕の過半は縁故者）、「米の積出時におしかけ、（仲仕に）つながっておさえた（米）」、「晩に積み出すことになった」、「このときも、仲仕は女衆にしらせてくれた」、「晩の出荷時に再度襲撃して、（米を）おさえた」、「一晩中の坐りこみ、見張りもやった」、「警察の干渉となった」、「男のひとが一人、大町の 小路の青物屋さん、女が何人か拘引された」、「警察へ女衆が押しかけ “ その男はなんにもしておられんがや、その男をつかまえるのなら、わたしらをつかまえて下はれ！ ” とがなりたてたら、解放された」、「汽車で米を出すというので、停車場道へ行って荷車をおさえた」、「魚津では、明治45年のときのほう

(米騒動)がもっと大きかった」、「にかいどう米騒動もあった」。

私のそのときのメモには、意味不明の「むしろ旗騒動」などという記載もある。その不完全きわまりない聞書は日時不明の上、かつ漠としすぎているかのようにおもわれる。しかし、既往の成果をかりて、今これに焦点をあててみるとかなりははっきりしてくる。すなわち、この年の魚津の米騒動が三次にまたがってあったとされる、(1)第1次の実力行使の日以前。(2)第1次=7月23日女46名が汽船伊吹丸の米積出しを阻止した日。(3)第2次=8月5,6,7日、婦女約百名が大小の米仲買・小売店、有力者宅におしかけ、役場に迫ろうとした日々。(4)第3次=8月25日約5,60名の女が停車場前で米の積出阻止を行なった日。江口つたの話は以上四つの事柄にほぼ分けられると考えられる。

3 経緯

幕末から明治期、累年のように米騒動をくりかえしてきたこの地には、ながい伝統と経験の結果、ほぼきまった騒動の順序と形式ができあがっていたようである。横山源之助が報告している米騒動と1918年の米騒動が似ているのはそのためだ。それはあちこちから恣意的、散発的に起こるのではなく、累年それを担ってきたある確定的な地区がなければならず、さらにそこには、講や結いのような慣習があって、それを統べるような経験に富んだ、そして騒動も何度も体験してき、その出勤の時や、どう動くかの行動の様式を決定、指示する主導者がなければならない。1918年の米騒動もこの三つの要件を逸脱するものではなかったはずだ。

それなら、騒動の順序と形式とはなにか。横山源之助の記述をかりるまでもないが、まずその二つの先例からふりかえておこう。

「米価は八九円に騰るべしと称するに及び。俄然として、一夜細民の群をなして路上を往来するを見る、米商の姓名を呼び罵詈の辞句を半紙に記して橋の畔、電信柱に張れるを見る、日を経るに随ふて益々喧騒を致し、或は米商の門戸に石を擲ち、甚しきは米商某を殺すべしなど放言するを聞くことさへあるに至る」(明治22年10月のとき)

「春来一二回貧民(多くは漁民)夜中群を為し競うて何か訴うる所あらんとせしも未だ真実窮乏の極に陥らぬ故にや警官の令直に解散し未だ大事に至らず烏合の衆たるを免れず候米商の前に貼紙を為し端書などを飛ばす候様なる事は時々有之趣」(同31年4月下旬のとき)

まず、こういう前駆行動がさきにあって、後に実力行使である汽船の米積出阻止や、米仲買商宅に闖入し器物を破壊するという行為に移っているのである。すなわち、図式は - 米価高騰 - 井戸端会議 - 井戸の主の決定 - 役割分担 - 貼紙・葉書 - 夜間呼ばわり - 米仲買・小売商交渉 - 町会議員・町役場へ、明治22年の米騒動で創設させた積立基金支出要求 - 汽船米積出実力阻止 - これらの順序と行動を繰り返して行なう。こういう行動様式がながい間に定型化していたのである。

そして1918年の場合。前年前半まで一升十銭をきっていた米価がじりじりと騰りはじめ、江口つたが強烈な記憶として口にした「十銭が二十銭、二十五銭」に急騰した二月前後には、彼女らも動きはじめていたのではないかと推察される。彼女らが担ってきた伝統の自負と慣いから。まして三倍(三十銭)を超えた六月下旬には。前駆的行動、貼紙をし、葉書を飛ばし、米仲買・小売商へ何度も押し

かけ、町を呼ばわり歩くなど。そして実行使直前になると - 具体性に欠ける 7月18日説（『高岡新報』）はおくとして、「二十日未明同海岸に於て女房共四十六人集合し役場へ押し寄せん」（『北陸タイムス』7・24）とした、あるいは騒動の2日前浜田米店へ「四十人ほどが押し寄せた」（『朝日新聞』1998・6・30）という事象を合せ - 江口つたが仲仕宿へ押しかけたといい、「数日間」、「一晩中の坐り込み、見張り」をしたという一触即発の緊張の状態があって、ついに7月23日汽船伊吹丸の米積出を実力阻止して事件にいたる。これが前駆段階から実行使段階へ移る経緯であったにちがいない。

そして、7月23日から8月25日停車場で貨車積出を妨害するまで、約一カ月間の表に現れた米騒動の期間があり、さらにこれに続いて、積立基金を獲得して一応収束に向かう後段階がある。これが前駆・実行・獲得と三段階をもった米騒動の全様であったろう。あるいは、後段階は9月17日福岡県明治炭鉱でおさまるまでとしてもいい。

4 発進地区

女衆「四十六人」というのがどの展開面にもあらわれる固定数であることに注目したい。それなら、その46人の出撃地区はどこであったか。これがはなはだ曖昧なのである。現在ですら。ただ「漁師町」「漁師部落」でいいだろうか。魚津の漁師町はいくつかの地区に分れ、かつ広域である。どこか。

すこし振り返ってみよう。

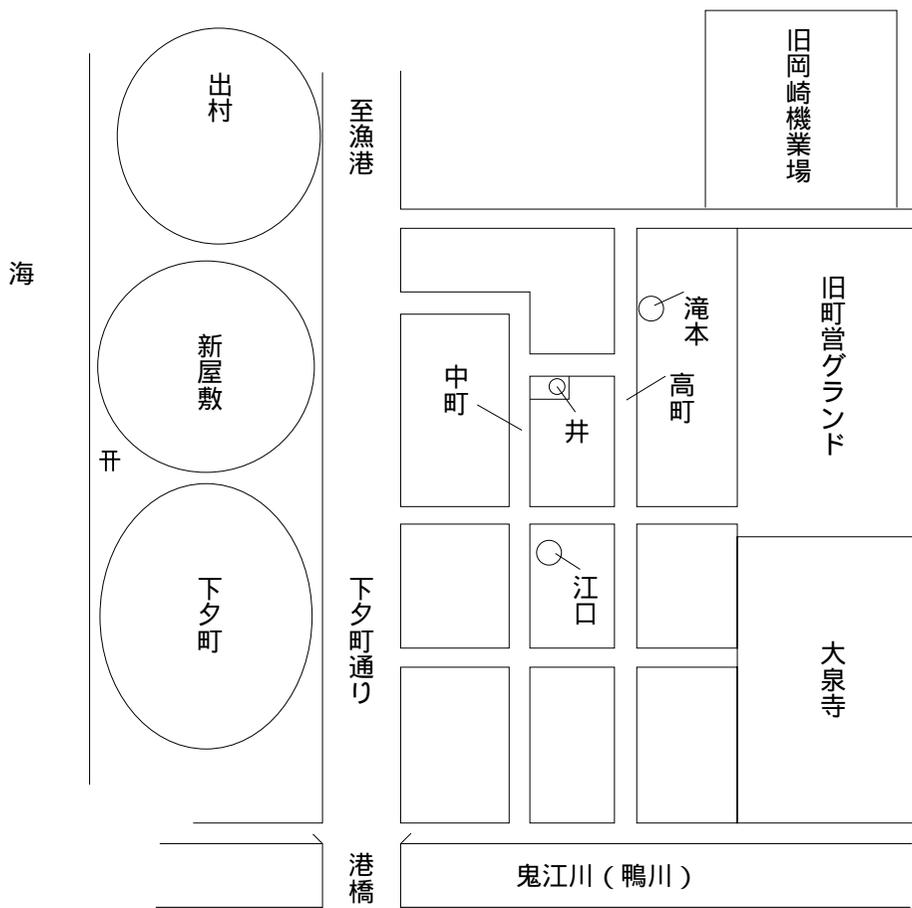
騒動を最初に報じた『北陸タイムス』（7・24）からして、「上下新獵師町」とありもしない町名を書く。「客月十八日」ともっともはやい日付を記した、後日の『高岡新報』（8・9）にいたってはただ魚津町の「細民婦女」。さらにはなはだしいのは、富山県警察部長、富山県内務部長連名の調査方命令に対し、下新川郡長の復命書はなにを血迷ったのか「新大獵師町」と誤記して回答した。しかも困ることに、その誤記された復命書の町名を戦後の先鞭的研究である「米騒動」の第一段階、『米騒動の研究』がそのまま疑いもせず転用した。それが「新下獵師町」とさりげなく正記されたのは後の復命書によってである（復命書類 = 法政大学大原社会問題研究所所蔵）。そして、その後の研究も前記二つの誤記をそのままに踏襲している。

だが、さすがに現地聞書類、たとえば北日本新聞社編『証言米騒動』（1974年）、田村昌夫等『いま、よみがえる米騒動』（1988年）、紙谷信雄「魚津町における一女性の歩み」（『魚津史談』第2号1979年）、同「魚津米騒動 - 歴史を歩く -」（『月刊歴史教育』1980年12月）等はほぼ「新下獵師町」を指している。当然のことである。

しかしながら、新下獵師町といっても実はひろい。1918年魚津の戸数三千二百余、人口一万四千余、漁業四百八十戸、約千人。新下獵師町は新上獵師町とともに、幾つもある漁師町の最大の町であり、明治四年でさえも「式百四軒」あった。

新下獵師町（現諏訪町）とは行政区称であって、昔からの呼称はでき町である。でき町は鬼江川（鴨川）の流れる右岸一帯の漁師町の全体を指し、そこは高町、中町、下夕町、新屋敷、出村町と、別個の呼称をもつ各町区に区分けされるのである。各町は諏訪社の夜祭におのおのが帆掛船になぞ

高町・中町地区 (は木村・浜元・板井)



らえた、あの摩天楼にまがう巨大な提灯のタテ物を一基づつ有しているように、町内会も別々であり、小さいながらもそれぞれが独立した町区である。町役場からみれば、税負担三分以下の、一緒に下口の漁師町にすぎないかもしれないが。

それなら、46人の女衆がどの地区からでたか。この人数が中核隊であり、かつその地区こそが震源地にちががなく、前進基地でなければならぬ。私がかつて聞き取った江口つたは中町であり、指揮をしたたっきゃさのおばばは高町である。紙谷信雄氏の「魚津町における一女性の歩み」を援用すれば、中町育ちで、堀井酒屋の前の家(新屋敷)へ嫁にいった話し手川岸きよは「井口ツタ、板井ツギ、木村のおばば、浜本のばあちゃんなど」にさそわれて、仲仕宿へ押しかけたという。紙谷氏は書いてないが、井口(=江口)ツタは勿論板井ツギも、木村、浜本(浜元)のおばばも、みな中町のひとたちである。とすれば、高町、中町をもって震源地区、前進基地とみなしていいだろう。女衆46人とは高町、中町連合軍であったにちがいない。そして、江口つたのような若手らでさえ、明治45年の騒動など、二、三を体験していたのである。かくして、つぎには血縁、地縁が重なり合った隣接地区下夕町、新屋敷、出村へと、でき町地区一帯の一家一人の動員がよびかけられたので

あろう。それが「百余人」の数だ。

5 井戸の所在

さて、つぎに井戸はどこにあったか。

実は先日同級会出席のため帰郷したおり、知人を伴い、そこへ行ってみた。ところが、井戸と洗い場のあったところには、その分だけ潰し、隣家が半分横にはみだすように増築され、また井戸の左隣の小家も壊され車二台をおく駐車場になっていたのである。まるで削り取ったように、井戸端のあった場所のみがまったく様変わりしていた。

近所の年寄に聞けば、その井戸がなくなってから、もう何十年も経つという。おもえば、この間には市の水道の敷設があり、盥や桶を駆逐する洗濯革命があった。各戸に水のなかったこの近辺にも、わざわざ家を出て、水濯ぎをする共同井戸はもう必要なくなっていたのである。私こそ 闊であった。時代の変革の波はここにも当然おしよせていたのである。今、昔そこに共同井戸のあったことをするのは、この近所でももはや一部の年寄のみらしい。あと10年、20年経てば完全にそれは忘れ去られるのであろう。

ともあれ、歴史の井戸端へ案内しよう。

さいわい、この地区は戦前戦後さほど変わっていない。変わったことといえば、日中戦争がはじまったころ、中町の下手にあった、下夕町の家並・道路一筋がつぶされ、いまの広い下夕町通りができたことと、高町の背後の、大泉寺裏の田圃が町営グラウンド（後市営住宅地）になったことくらいであろう。

高町、中町地区は、海側にある下夕町、新屋敷、出村地区ともちがい、海からもっとも離れ、浜辺を散策する、あるいは海岸縁の諏訪社を詣でる人たちも、めったに足を向けない地区である。魚津のひとでもここを歩いたものは少ないだろう。したがって、その奥にあった共同井戸を知る者はさらにすくない。米騒動の目撃者であり、研究者であった先年亡くなったI氏でさえご存知なかったという。

くわえて、高町、中町は魚津の漁師町のなかでももっとも小家が密集している地区である。そして高町・中町の狭い両通りはタテに二列、そこにこまかな家がまるで八モニカ長屋かのように、背中合わせに並んでいる。鬼江川（鴨川）のほうから入っていくと、丁度どんづまりに近く、高町、中町を結ぶところに、高町、中町のひとたちが共同で使う井戸と洗い場があったのである。

その井戸・洗い場というのは、伏流水の豊かな魚津のあちこちにあった、溢れ出る水を利用して即席の洗い場ともなる貯水槽や、新屋敷に一つあったと記憶する少人数用の井戸端（堀井酒屋裏）ともちがい、おおきな井戸端であった。沸井戸であったか、引井であったか。友人江口三郎の記憶もかりていうと、全体の広さは一間半×一間半、片側に井戸があり、それは径三尺の土管の円井戸で、高さが腰位まで、いつも水が溢れ、片側が洗い場であり、下はセメント床、7、8人のものが寄り合って鍋釜のゆすぎ、洗濯を一緒にできるほどの広さがあり、上はトタン葺きであったか、井戸と洗い場の全体をすっぽりと蔽う屋根がかかっており、壁はなく、出入り自由の吹抜けの小屋のようであった。素朴な拵えであるが、こういった整った井戸端は、私の記憶では魚津のどこにもな

かったはずである。この井戸端の在様は、米騒動は井戸端会議からはじまったという成語がけっして修飾でなかったことを正しく裏付けている。

この井戸は高町、中町が接点をなす角にあるが、そしてそこには、昔米騒動を行事のようにしてきた、たっきゃさのおばばのような経験豊かなひとがいて、水場に来るおばば、おかか、あねまらの女衆をなにかにつけてリードしていたのであろう。

いま、井戸のあった角に立って、高町、中町の二つの通りを見渡せば、成程家数6、70軒はあるであろう。一家一人の動員という、江口つたのいった言葉がよみがえる。46人の女衆はまさしくここから出撃した。

むすびに

鍋割月という、いかにも中世的な言葉は今日まで日常のなかに生きてきた。それは歴史の遠さをおもわせる。

米騒動は幕末からあったとされる。浦々にあった義倉の存在は、はるかな米騒動の歴史を物語る。

生活史と民俗史の掘り起こしが必要ではないだろうか。

漁師町の女、子供は地曳網をひきに行き、その後女衆はさそいあってよくお茶をのんでいた。

私は下夕町の港橋の袂で小学校に入り、その後鬼江川(鴨川)を背後にした餌指町に引越したが、その家の向かいの大きなかます場(蓆や吠を入れて置く倉庫)の中で、漁師町のおかかたちが二、三十人坐りながら、何かを声を揃えて唄い、北海道へ送るための蓆を織ったりしていた。また、背にホイ(柴)を負い腰を屈めながら、数十人のおばば、おかかたちが一列につらなって来るのを見たが、おそらくそれは年に一度定められた日に入会山へ行ってきた帰りであったろう。

いま、そういうひとたちを憶いだす。やはりそこには講というか、結いというか、そういうものがあつたのではなからうか。おそらくは井戸にもなにかとりきめが。そしてその世話役らがいて。なんらかのそういう基盤があつたのであろう。

発言権も、決定権も女衆に握られていた男衆は、女どもは暇だったからと、やっかみ半分に対岸視するが。

なぜ米騒動が続発したか。

なぜ男衆でなく、女衆であつたか。

米騒動は富山県下の浦々に呼応して起こる年中行事のようなものであつた。それは米価が高くなると米の輸出を止め、米価をおさえようとする、米どころなるがゆえに起きた。そして女たちがそれを遂行する特異な性格をもち、しかもそれは幕末期から近代にかけ半世紀以上の永きにわたって持続されてきた。他に例をみない持続運動であつた。それはもはや一揆とか騒動という事件用語をもって呼ぶよりも、騒動的な性格を帯びた、一種の長期運動であつたといつていいだろう。維新はじめに続発した百姓一揆も、自由民権運動その他近代に発生したすべての民主主義運動も、これに比べれば、一時的、単発的であつたろう。“元始、女性は太陽であつた”の名語をのこした、平塚雷鳥ら青鞥社の女性解放運動も、はるかに後発のものであつた。米騒動の女たちは米価騰貴が米仲買

商らの相場師的投機のからくりにあることをするどく見抜いていた。それゆえにみずからの要求を連帯して灯しつつ、不条理とのたたかいを誰よりも早く始め、誰よりも長く持続してきたのである。その意味で、大地に足を着けた彼女らの米騒動の運動は日本近代におけるあらゆる民主主義運動や女性運動の嫡流であったと断言していい。それは明治・大正・昭和民主主義の地平をひらく基となった。

米騒動を主導してきた、この地は日本の民主主義と女性運動の聖地にひとしい。

米騒動が中世型であったか、近代型であったか。農漁村型であったか、都市型であったか。そういう議論に私はあまり意味を感じない。

自分らは野の草、海の草ならなんでも食べ、艀を漕ぐものたちの米のために立ち上がった献身と愛の女たち。

“その男をつかまえるのなら、わたしらをつかまえて下はれ！”とおらんでやまなかつた情と責任を知っていた女たち。

海鳴りの底からわきでてきた、知と力と愛のわたつみの女たちが歴史に刻みつけた足跡はけっして消えることはない。

注 1918年の米騒動の起源は、従来ほぼ定説化した魚津における7月23日説と、これに反論する、より早い日にもとめる説（水橋の場合7月上旬 井本三夫、米騒動史研究会北陸支部）があるが、それは何をもち「騒動」とするか、実力行動が事件化し表面化した日をいうか、前駆的予備段階もふくめていうか、説のたてかたによるのであろう。

（たちばな・ゆういち 横山源之助研究家、元法政大学大原社会問題研究所所員）